日本文化ブームからジャパン・クールまで
—日本研究の行方—

佐々木　隆

プロローグ

「日本」とは何かといったアプローチには２つあろう。第１は日本国内で行われるもの（日本人自身が行うもの）。第２は外国で行われるもの（外国人によるもの）。本稿では日本文化ブームから現在のジャパン・クールまでを視野に入れることとなるが、文化交流の流れ、また、国内における国学、日本学、国際日本学といった流れも視野に入れながらその概観を考察してみたい。

１　国学から日本学へ、そして国際日本学

「日本」とは何か、日本人の精神の根本を探る研究として江戸時代には「国学」が誕生していることは周知の通りだ。契沖(1640-1701)、荷田春満(1669-1736)、賀茂真淵(1697-1769)、本居宣長(1730-1801)、平田篤胤(1776-1843)などの「国学」。その他、谷秦山(1663-1718)が「日本ノ学」（日本学）を提唱するなどの動きもあった。明治維新後は三宅雪嶺『日本人』、陸羯南『日本』、和辻哲郎『日本精神史研究』はもちろんのこと、柳田國男(1875-1962)、折口信夫(1887-1953)といった民俗学者の業績も忘れることはできない。

戦前には小野正康『日本学とその思惟』（建文館、1934年）、原正男『日本学の基礎体系』（慶應通信、1935年）、小野正康『日本学としての学問教育』（国民精神文化研究第10冊、国民精神文化研究所、1935年）、松永材『日本学建設への道』（早稲田大学日本主義学会、1936年）、小野正康『日本学の根本問題』（目黒書店、1937年）、正真正義『日本学の樹立と亜細亜鎖国』（国民思想指導原理研究会、1938年）、『日本学叢書』（第１巻～第13巻）（雄山閣、1938年～1940年）、卜部直輔『日本学の基本的諸問題』（東風閣東京事務所、1939年）、財団法人日本学研究所設立（1939年）、三浦圭三『日本学綱要』（三友社、1939年）、苦爪恵三郎・野尻義一『日本学としての倫理学』（山口県師範学校教科研究部、1940年）、『日本学研究』（財団法人日本学研究所、1941年）創刊、寺田彌吉『日本学序説』（冨山房、1942年）などが発

表されている。

開国後から始まる国際化の問題や日本文化発信という課題も少なからず影響しているが、日本人による日本の見直しの時期は何回かその基点を考えることができる。特に戦後、1951年にユネスコ加盟、1957年に国際ペンクラブ東京大会の開催、1964年のオリンピック東京大会、1968年に文化庁発足、1970年の大阪万国博覧会、国際交流基金設立、1972年の沖縄復帰、日本ペンクラブ主催の国際日本研究会議（京都）の開催などは、日本の国際化、日本文化発信には大きな役割を果たした。日本学と言う表現はすでに使用されていたが梅原猛『日本学の哲学的反省』(1976) には次のような指摘がある。

> この日本学というのは、だいたい今まで日本の学問の伝統におきまして、国学といわれた学問とほぼ研究の対象を同一とすると考えて頂いて差し支えありません。ここで、わざわざ国学という名前を避けまして日本学というような名前を私が用いましたのは、それは国学というのは皆さんご存じのように、江戸時代の契沖、真淵、宣長というような人たちによって創造された学問ですが、その学問はたいへんナショナリスティックな性格をもっている、それは偏狂なともいえる国粋主義というものをもっている。と同時に儒教、仏教に対する、はげしい敵意をもっているわけであります。・・・(中略)・・・国学の偏狭な視野が学問の対象をも狭くしています。そういう国学にたいする批判の意味で、私は、あえて日本学という名称を使っている次第であります。(1)

その後は『日本学』(1983年5月) 創刊、粕谷一希「日本学研究の潮流」(『現代の理論』第221号、現代の理論社、1986年1月)、足立原實主宰の日本学研究会（1987年11月）設立、清水良衛『日本学のすすめ』(北樹出版、1988年10月)、剣持武彦『比較日本学のすすめ』(朝文社、1992年8月)、楠正弘『文化学としての日本学』(創文社、1993年6月）など枚挙に暇がない。研究所も相次いで設立されている。特に1987年5月には国際日本文化研究センターが設立されていることは注目に値しよう。初代センター長は梅原猛(b. 1925)である。その後、1992年には同センターに総合研究大学院大学文化科学研究国際日本研究専攻も設置されている。同センターの活動内容は以下の通りである。

1. 国際日本文化研究センターは、国際的・学際的・総合的な観点から、日本文化に関する研究課題を設け、国内外から参加する様々な分野の研究者による共同研究を行っています。

2. 共同研究は、研究域・研究軸という枠組みのもとに、柔軟な組織・運営により推進しています。

3. 世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、実情に応じた研究協力を行っています。

4. 研究成果は、出版物、講演会、シンポジウムなど様々な形で順次地域社会に提供しています。

5. 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士課程では、次代の研究者養成を行っています。また、国内外の大学院生・留学生を受入れて研究指導を行っています。(2)

1995年4月には金沢工業大学日本学研究所が設立されている。

> 我が国の歴史や伝統に関する研究と普及を目指す機関として創
> 設されました。日本人とは何か、日本の精神文化とは如何なるものかといったことを研究し、その本質を明らかにし、その伝統の良い部分を後世に伝えていくことを目的としています。(3)

また、2000年4月には立教大学日本学研究所が設立された。

> 本学は、近年、外国人の正規留学生、および大学間交流による 短期留学生も大幅に増加し、国際交流の面で大きな変貌を遂げつある。このような国際化を目指す中で、真の意味での国際交流を深めるためには、日本の言語・文化・思想・歴史・社会などに関する研究、すなわち「日本学」の研究を推進し、積極的に人的交流をはかり、相互理解を深めていかねばならない。そこで、本学に「日本学研究所」を設置する。
> 海外の日本学研究との連携を図り、立教大学を媒体として質・量ともに豊かな研究を推進する。具体的には次のような事業を行う 。

1．日本学に関する研究・調査
2．国内・国外の日本学研究者との学術交流の推進
3．研究に必要な図書・資料・器材の整備・管理
4．日本学研究の成果の公表
5．研究会、講演会、講座等の開催
6．学外の研究者ならびに留学生に対する日本学研究の援助
7．その他研究所の目的達成に必要な事項(4)

2000年11月には島田昌彦『日本学への道　世紀を越えて』(明治書院)では、大学院・大学教授として留学生への授業を通して学問体系としての日本学についてまさにこれまでの日本学の反省と今後の日本学について考察したものである。

日本学を新しい視点でとらえようとした法政大学国際日本学研究センター(Hosei University Center for International Japan-Studies)は2002年10月1日に設立された。同センターは『国際日本学』を2003年10月に発刊した。これは、文部科学省21世紀ＣＯプログラム採択「日本発信の国際日本学の構築」研究成果報告集である。第1号の中野栄夫「『国際日本学』方法論構築をめざして」は「はじめに―日本学への関心―」「１　国際日本学の構想」「２　日本・日本語・日本人」「３　日本における日本学研究の足どり」「４　いくつかの試み」、「まとめ」の内容。最後に『日本学』総目次も収録されている。

「１　国際日本学の構想」には次のような記述がある。

「国際日本学」研究の基本的姿勢は、「異文化研究としての日本学」の構築と、「日本文化の国際性」の解明であった。前者の「異文化研究としての日本学」とは、つぎのようなことを意図していた。諸外国で展開された日本学は「異文化」研究としてのものである。それは自国の歴史・文化を見ようとする「同文化」的視野とは当然異なったものである。・・・以下省略・・・

つぎに後者の「日本文化の国際性」であるが、その国際性として、以下の四つの柱を提起し、それにもとづいて研究計画を立案した。

① 視点の国際性：自国の歴史・文化を「異文化」視する国際的な視点を導入する。
② 文化の国際性：異文化交流のもとで形成された日本文化の多様性・

重層性に着目する。

③　研究組織の国際性：現地調査を含む共同研究のため、国際チームを組織する。

④　教育の国際性：研究成果を教育に活かし、国際社会で通用する創造的人材養成を目指す。(5)

2004 年 4 月にはお茶の水女子大学比較日本学研究センターが設立され、2007 年 4 月にはお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻国際日本学領域が設置された。

国際日本学領域は、本学の戦略的研究・教育領域として位置づけられており、国際的に多様化する大学院教育の現状に対応して、国際的視野のなかで日本研究を進め、文学・言語学・歴史学・考古学・思想・文化・身体論の総合学としての日本学を世界に発信する人材を養成することにより、日本研究における世界の教育拠点となることを目標としている。(6)

2008年4月には明治大学国際日本学部が設置された。その教育目標は以下の通りである。

国際日本学部は、日本学を中心領域としていますが、それは伝統的な日本文化に加えて、今日世界への情報発信が強く求められている現代日本文化、さらにはその発信基盤としての企業・産業・社会をも含めた広い意味での日本の文化と社会システムを教育研究対象としています。またその一方では、集中的な英語教育と異文化を正しく理解するための国際教養教育にも力を注ぎ、「世界の中の日本」を自覚して、積極的に世界に情報発信しうる真の国際人を育成していきます。(7)

日本文化発信がキーワードとなろうが、発信する内容の多様性こそが重要なのではないだろうか。

2　日本文化ブームからクール・ジャパンまで

海外の日本研究はいわゆる幕末の日本文化ブームから始まった。

日本文化ブームの初期は何かと言えば「ジャポニスム」である。ここ数年話題となっている「クール・ジャパン」も大きな視野から見れば海外におけ

る日本文化ブームのひとつということになる。海外における日本文化ブームについては、大薗友和『世界「文化力戦争」大図解』(2008) に掲載されている「日本文化ブームの歴史」によれば、大別すると3期に分けられるという。(8)

第1次日本文化ブームは、幕末の開国期から世界恐慌まで。葛飾北斎 (1760-1849) の版画がフランス人の目に触れ、歌川広重 (1797-1858) の浮世絵も海外へ紹介され、そこから波動したいわゆるジャポニスムである。「日本主義」「日本ブーム」「日本熱」「日本趣味」といった意味では、特に美術においては印象派とアール・ヌーヴォーに日本美術の影響を認めることができる。1862年の第2回ロンドン万国博覧会、1867年の第2回パリ万国博覧会、1873年のウィーン万国博覧会、1878年の第3回パリ万国博覧会、1900年の第5回パリ万国博覧会に使節団として、藩として、国家として日本は参加している。参加形態は様々であるが、日本文化の発信という点が重要であろう。また、1925年にアーサー・ウェイリー (Arthur Waley, 1889-1966) によって『源氏物語』(*The Tale of Genji*)の英訳が出版されたこともその後の日本文化ブームに影響を与えることとなる。そして、同時に外国人による日本研究も始まって来るのである。欧米人でも古くはルイス・フロイス (Luís Fróis, 1532-1597) のように日本に滞在した外国人が、その滞在時の日本の印象等をまとめたものもあるが、これまで鎖国期においてもシーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866) のように日本での滞在の様子を海外で発表したものはあるが、日本に対する理解を深める外国人による日本研究は開国後に飛躍的に進むことになる。中でも1855年に設置されたオランダのライデン大学人文学部日本学科は、世界の日本研究から見てもかなり初期のものと言えよう。日本研究は外交上も必要であり、さらには明治時代に大学教授として招聘された外国人教員、日本に派遣された大使などがその経験をもとに貴重な日本滞在記や日本研究書等を発表した。すべてを紹介することはできないので、ここでは簡単に紹介しておくことにとどめたい。ラザフォード・オールコック(Sir Rutherford Alcok, 1809-1897)、アーネスト・サトウ(Sir Ernest Mason Satwo, 1843-1929)、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberbain, 1850-1935)、ウイリアム・ジョージ・アストン(William George Aston, 1841-1911)等がある。オールコックは外交官として中国・日本に赴任していた。チャンバレンは帝国大学の教授として教壇に立っていた。

開国後、日本が近代化を模索していた時期に、英文で発表された彼等の

日本研究がその後の日本研究に大きな影響を与えたことは言うまでもないことだ。“Studies on Japan”, “Japanese Studies”, “Japanology” として一つの研究分野を打ち立てているのである。以降もエドウィン・ライシャワー(Edwin Oldfather Reischauer, 1910-1990)、エドワード・サイデンステッカー(Edward G. Seidensticker, 1921-2007)、ドナルド・キーン (Donald Keene, b.1922)と言った日本研究者が輩出されている。

第２次日本文化ブームは終戦から冷戦終結期（東西ベルリンの壁崩壊)。戦後、日本が国際社会に復帰するにあたり、文化の果たした役割は無視することはできない。戦後の日本文化ブームあるいは、世界に向けて日本文化が発信され、評価を受けたものとして日本映画、オリンピックと大阪万博、ファミコン等である。

戦後の日本映画は 1950 年～ 1960 年の間に国際映画祭に登場し、輝かしい成果を残している。その後ももちろん日本映画は世界に発信されている。また、黒澤明（1910-1998）の海外における評価は日本人が思う以上のものである。黒澤明監督は国際映画祭で受賞したということ以上に、国際的にも映画界において多大な影響を与えた。ジョージ・ルーカス監督『スター・ウォーズ』(1977)も黒澤明監督『七人の侍』(1954　)に強い影響を受けていることは周知の通りである。『サヨナラ』(1957)は朝鮮戦争時の日本人女性とアメリカ軍人との恋物語である。日本映画として脚光を浴びたのは概して「サムライ物」であるが、“samurai” という言葉はすでに現在でも英語に定着していることを考えると、その貢献は小さくない。また、黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)は現在でもシェイクスピアの『マクベス』の翻案映画として高い評価を受けている。(9)

日本でオリンピックが開催されたのは 1964 年の東京オリンピックと 1972 年の札幌冬季オリンピックである。(その後、1998 年には長野冬季オリンピックが開催されている。) 1964 年の東京オリンピック開催は戦後初めて日本全体が世界中の人々を受け入れたまさに超大イベントであった。国内インフラ整備としては東海道新幹線をはじめとした鉄道や道路網の拡充、カラー放送・カラーテレビの普及、国際放送の整備などがある。また、東京オリンピック＝国際化＝英会話という図式もあり、1963 年には実用英語検定試験（英検）も始まった。1970 年には岡本太郎（1911-1996）がテーマ展示プロデューサーを務め、『太陽の塔』を設計し、話題となったのが大阪万国博覧会である。こうした国際的な大イベントと呼応して政府にも動きがあった。1964 年には外務省に情報文化局文化事業部が設立、1972 年には外務

省の外郭団体として国際交流基金が設立されたことだ。

「ファミコン」は1983年に任天堂から発売されたゲーム機である。同年、セガから家庭用ゲーム機「ＳＧ 1000」の発売、東京ディズにーランドが開業した年でもある。まさにアミューズメント＆ゲーム時代の到来である。こうしたファミコンに代表されるゲーム機は、現在では映像・音楽・ゲームなどは、デジタルコンテンツ産業として日本を支える一大産業となっている。

第３次日本文化ブームは冷戦終結後から現在。その内容はおもに、アニメ、日本映画、日本食、ＰＣ及びデジタルカメラを含めたデジタルコンテンツ産業がその代表と言える。第３次日本文化ブームの皮切りは 1990 年の大友克洋監督『アキラ』が全米で公開され、その翌年には英仏独でも公開され、世界中のアニメ業界人に衝撃を与えたことだ。国際映画祭でも北野武(b.1947)、宮崎駿(b.1941)、『ラスト・サムライ』の俳優・渡辺謙（b.1959）等が活躍したことは周知の通りである。日本映画（アニメ映画を含む）の躍進振りは目覚ましいものがある。また、いわゆる演劇界においても、必ずしも能狂言・歌舞伎だけでなく、欧米において高く評価された蜷川幸雄（b.1935）の存在も忘れることはできない。また、マンガ、アニメ、ゲームなどいわゆるデジタルコンテンツ産業が日本から世界中へ発信され、第３次日本文化ブームのうち 2002 年以降はクール・ジャパンと呼ばれた発信アイテムは特に注目に値しよう。

大友克洋監督『AKIRA』(1988)に代表されるアニメは、1990年に全米で、1991 年には英仏独でも公開され、一大ブームとなった。日本のアニメ映画を世界に認めさせた先駆者でもある。

> Adapted form the early part of the long-running mangaby director Otomo, Akira is almost singlehandedlyresponsible for the early 1990s boom in anime in the English language. (10)

Susan J. Napier. *Anime：from “Akira” to “Princess Mononoke”* (2000)には次のような記載もある。

> Japanese animation or “animé” as it is now usually referredto in both Japan and the West, is a phenomenon of popular culture. (11)

そのタイトルからもわかるように *Akira* が起点となっている。以降は鳥

山明『ドラゴンボール』シリーズ、ゲームソフトから始まった『ポケット・モンスター』シリーズなどもある。Patrick W. Galbraith. *The Otaku Encyclopedia* (2009)では次のような説明がある。

> *Pokémon* was the first worldwide mainstream breakout success story for Japanese animation and was a turning point for the globalization of anime and manga. In 1999, the *Pokémon* game was selling in seventy countries, the anime was broadcast in sixty-one countries and two territories, the movies had been shown in forty-four countries, and the card games had been translated into eighty languages. In 2004, the franchise was valued at $15 billion worldwide.
>
> *Pokémon* opened the door for the COOL JAPAN movment but has also been criticized as promoting materialism. In 1999, Nintendo was unsuccessfully sued on the grounds that the *Pokémon Trading Card Game* caused two nine-year-old boys to become addicted to gambling. (12)

ここではやり注目に値することは『ポケモン』がクール・ジャパンの扉を開けたということだ。

藤子・F・不二雄（b.1933）によるマンガ『ドラえもん』は 1969 年から 1996 年に発表され、1973 年にはテレビアニメ化され、放映が開始された。TIMEaisa.com の“Asian Heroes”によれば、“DORAEMON may be Japan's cutest export”(13) という。

Patrick W. Galbraith. *The Otaku Encyclopedia* (2009)には“Doraemon”の項目はないが、“Anime Ambassador”が項目に入っている。『ドラえもん』は 2008 年には外務省のアニメ大使に任命されたことにも触れている。この時第 1 回カワイイ大使として任命されたのは中川翔子（b.1985）あった。

宮崎駿の映画作品が海外で注目を浴びて、海外でも本格的に公開されるようになったのは、『もののけ姫』(1997)あたりからであろうか。その後の活躍は目覚ましいものがあり、『千と千尋の神隠し』(2001)はベルリン国際映画祭金熊賞を受賞、米・アカデミー賞長編アニメ賞を受賞するなど、日本のアニメ映画を世界に押し上げた第 1 人者であることに間違いない。

第 1 次から第 3 次の日本文化ブームに共通して言えることは、国策とし

て戦略的に日本から発信したものではないということだ。特に、第 3 次のジャパン・クールという日本文化ブームはマンガ／アニメ業界だけでなく、デジタルコンテンツ産業、観光産業等、広範囲にわたる産業との関連があることから、国自体があわててマンガ／アニメに注目したという印象は避けられないだろう。

2001年の文化芸術振興基本法により、マンガ／アニメは法的にもメディア芸術の一分野としての地位が与えられた。2002年のダグラス・マクグレイの“Japan Gross National Cool”論文から注目を浴びた「クール・ジャパン」という考え方に、2004年のジョセフ・S・ナイ(Joseph Samuel Nye, b.1937)が発表した「ソフト・パワー」という考え方が加わり、マンガ／アニメの位置付けは大きく変化して来た。

> 経済力や軍事力などで相手に影響をおよぼす伝統的な国力が　ハードパワーであるのに対して、学術・文化や価値・理念など自らの魅力によって相手を魅了してしまう新しい国力の概念がソフトパワーである。米国は世界最強の軍事力とコカ・コーラからiPodやグーグルまで、他を圧倒するソフトパワーを兼ね備えている。(14)

日本はどうであろうか。ソフト・パワーとして、「コカ・コーラ、iPod、グーグル」の代わりに「マンガ、アニメ」がここに入って来ることに違和感はあるであろうか。

「クール・ジャパン」(“cool Japan”) はジャーナリストのダグラス・マクグレイ(Douglas McGray, 1975-)が外交専門誌 *Foreign Policy* (May/June, 2002) に発表した“Japan’s Gross National Cool”という論文が基点となり、その後、神山京子訳「<ナショナル・クールという新たな国力>世界を闊歩する日本のカッコよさ」(『中央公論』第118巻第5号、2003年5月) が発表されると加速度的に「クール・ジャパン」は広がっていった。

実はマクグレイ論文でははっきりと“cool Japan”を定義しているわけではない。その論文の結論部分は以下の通りである。

> Japan’s history of remarkable revivals suggests that the outcome of that transformation is more likely to be rebirth than ruin. Standing astride channels of communication, Japan already possesses a vast reserve of potential soft power. And with the

cultural reach of a superpower already in place, it's hard to imagine that Japan will be content to remain so much medium and so little message.(15)

「クール・ジャパン」において最も問題なのは、伝統的日本文化に無自覚なまま外国文化を日本文化に融合させようとしていることではないだろうか。また、「クール・ジャパン」は単なる日本のポップ・カルチャーなのだろうか。ここで重要なのは「クール・ジャパン」を提唱しているのは外国人であることだ。外国人にとって、「クール・ジャパン」（かっこいいニッポン）がポップ・カルチャーであろうと、伝統文化であろうとあまり意味はないのだ。しかし、現在国内でいわゆる「クール・ジャパン」を論じているのは日本人であり、日本政府ということになろうか。日本人として、「クール・ジャパン」をどのように捉えるのかは日本（人）の責務として考えなければならない。

日本人自身がポップ・カルチャーの基盤となっている伝統を見落としている傾向もある。では、「伝統とは何か」。単に能・狂言・歌舞伎といったような伝統芸能を指すのではなく、日本人気質などを含めた国民性といったものまで含まれることになろう。海外による日本文化ブームは特に現代では単にエキゾチックであるからといったような簡単な理由ではなく、日本人の繊細さなど、これまでの伝統芸能や自動車産業、電子機器の小型化を通して日本の総合イメージから由来していることを理解することが重要なのである。

エピローグ

現状において日本研究については少なくても３つの点において今後も検討が必要であろう。第１点は仏教や儒学以前の日本を研究する古学、国学、日本学との捉え方との関係。日本人としてのアイデンティティの問題もあるが、最終的には「日本」とは何かが規定できなければ、日本学自体も成り立たなくなってしまう。第２点は日本は異文化を多く受け入れている、あるいは共生しているが日本人自身はそれをどう捉えているのか。第３点はグローバリゼーションの時代、世界の中の日本という視点から見ると、海外の日本研究を無視できなくなったという点である。Japanology あるいは Studies on Japan、Japanese Studies と日本学が異なるかどうかは議論が残されるが、外国人の見る日本観あるいは日本人観は無視できないというものだ。ジャパ

ン・クールはそれを如実に表していることになろう。「かっこいいニッポン」の本質は日本学あるいは国際日本学にとって大きな鍵を握ることになろう。まさに、「異文化から見た日本」をどう日本人として捉えていくかは今後の大きな課題である。ドナルド・キーンは30年以上前に「日本学とは何か」(1972)において「世界的視野に立って日本文化は問い直されるべきだ」(16)と指摘しているが、残念ながらこの指摘を越えていないのが現状ではなかろうか。

注

(1) 梅原猛『日本学の哲学的反省』(講談社、1976年8月)、p. 12-13.
(2) (http://www.nichibun.ac.jp/info/activities.html) (2010年5月 20 日)
(3) (http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/wwwr/03/data/203.html) (2010 年 5 月 15 日)
(4) (http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IJS/outline/meaning/) (2010年5月15日)
(5) 中野栄夫「『国際日本学』方法論構築をめざして」(『国際日本学』第1号、法政大学国際日本学研究センター、2003年10月)、pp. 7-8.
(6) (http://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/japan/d_index.html) (2010年5月15日)
(7) (http://www.meiji.ac.jp/nippon/outline.html) (2010年5月20日)
(8) 大薗友和『世界「文化力戦争」大図解』(小学館、2008年8月), pp. 104-106
(9) 佐々木隆「日本における Shakespeare 映像」(『武蔵野短期大学研究紀要』第9輯、1995年6月) より。
(10) Clements, Jonathan and McCarthy, Helen, editors. *The Anime Encylcopedia* (Berkeley, California: Stone Bridge Press, 2001), p. 9.
(11) Napier, Susan J. *Anime: from "Akira" to "Princess Mononoke"* (New York: Palgrave, 2000), p. 3.
(12) Patrick W. Galbraith. *The Otaku Encyclopedia* (Tokyo: Kodansha International, 2009), p. 187.
(13) (http://www.time.com/time/asia/features/heroes/doraemon.html) (2010年2月5日)
(14) 蟹瀬誠一「序」(明治大学国際日本学部編『[ニッポン学] の現在 GENJIからクール・ジャパンへ』角川学芸出版、2008年5月)、pp. 4-5.
(15) McGray, Douglas."Japan's Gross National Cool" (*Foreign Policy*. May/June, 2002), p. 54.
(16) ドナルド・キーン「日本学とは何か」(『中央公論』第87巻第10号、中央公論社、1972年10月)、p. 264.